開けてみると主催者発表369人という参加者を集めることができ、第１回目の大会としては、成功だったのではないかと思っています。

最後になりましたが、無事に大会を終えることができたのは、準備に携わった実行委員の先生方の努力もさることながら、当日の受付や会場係を手伝って頂いた学生諸氏の協力によるところが大きかったと思います。この場を借りてお礼を申し上げます。

(News Letter No. 6より転載)

技術展示を振り返って

伊藤 一男
技術展示担当
(旭エレクトロニクス㈱ＶＲ部)

10月9日、記念すべき日本ＶＲ学会の第一回大会が、盛況の内に無事終了した。大会委員長の廣瀬先生をはじめ、多くの関係者の努力の結晶の賜であり、技術展示委員の一人であった私にとって、大会終了後のビールは格別においしかった。皆初めての体験であったこの大会を、実行委員、技術展示担当として振り返ってみたい。

当初の企画段階では、『やはりＶＲだから多くの人に体験してもらうのが一番』と展示をすることにすんなり決まったが、どのようなＶＲを出すのが良いのか、どこが出展してくれるのか、果たして展示の予算はいくらかかるのかなど、課題は山積で前途多難であった。出展は、学術展示８件、アート展示3件、企業展示10件、合計21展示となり、なかなか見応えのある展示になったと思う。特に、学術展示とアート展示は、日頃研究室でしか見ることのできない研究を多くの人たちに見て体験してもらったことは、今後のＶＲの普及促進に大いに貢献したと思う。また、展示内容の面でも、３Ｄディスプレイ、３Ｄ操作デバイス、３Ｄ音響の展示、医療、地震体験アプリケーションの展示等、ＶＲならではのバラエティに富んだ展示が揃ったように思う。来年は、さらにいろいろな分野からの展示が増えることを期待するが、会場での展示と同時にInternetを利用してリアルタイムに全国の研究室を紹介したらどうだろうか？できれば、VRML等を使ってインタラクティブな体験ができればベストと思うが……。

ＶＲ学会が他の学会と違うところは、その応用分野の広さもさることながら、研究成果を、体験を通じ表現し、ディスカッションができることではないかと思う。その意味では、来年の名古屋での第二回大会にも多くの研究者が展示を希望するような環境を整えることが必要ではないかと思う。

最後に、ＶＲに携わっている企業の一員として、この歴史的第一回大会の運営に少しでも関わることができたことを喜びとし、来年以降も、できる限りの支援をしていきたいと思っている。

(News Letter No. 6より転載)

第1回日本バーチャルリアリティ大会を終えて

石井　抱
会計担当
(東京大学)

今回、第一回日本バーチャルリアリティ学会大会の実行委員の機会を頂きまして、近年稀に見るスマートな学術講演会の実現に微力ながらお手伝いできたことを大変嬉しく思っております。

非常に環境の整った代々木オリンピックセンターにおいて開かれた第一回大会ですが、最先端のしかも多方面の研究の講演を聞き、実際に見て触れるという実体験を同時に共有できる空間を数多くの人々に味わって頂けばという大会当初の目標を十分に達成できたのではないかと思っております。第一回の大会ということもあり、大会前日は、どのくらいの数の方々が参加して頂けるかと思っておりましたが、予想をはるかに越える数の方々が参加して頂けたことに、大会運営に携わるものとして感激しております。

私個人としては、数多くの素晴らしい講演や展示もさることながら、夜の懇親会におけるガムランの生の響きが非常に印象的であり、人間の五感に響きわたるあの音色が忘れられないものがありました。学会の大会の懇親会でこのような体験ができるとは思っておりませんでしたので、意外であったとともにとても衝撃的でした。

このような大会が来年以降も開催されると思うと、今からとても待ち遠しく思っております。今年の大会では、実行委員という立場上、全ての講演を聞くことができる時間がありませんでしたが、来年の大会では、参加者として大会を満喫できればと思っております。

最後に、この第一回日本バーチャルリアリティ学会大会を成功に導いて頂きました、廣瀬先生を始めとする他の大会実行委員の方々、日本バーチャルリアリティ学会